

『天主実義』の出版

柴田, 篤

九州大学大学院人文科学研究院哲学部門 : 教授 : 中国哲学史

<https://doi.org/10.15017/3642>

出版情報 : 哲學年報. 63, pp.107-132, 2004-03-05. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン :
権利関係 :

『天主実義』の出版

柴田 篤

はじめに

『天主実義』は、イタリア出身のイエズス会士マテオ・リッチ (Matteo Ricci) が、利瑪竇という中国名で著述・出版した書物である。中国人の学者 (中土) と西洋人の学者 (西土) との間答という形を取って、カトリック・キリスト教 (天主教) をめぐる議論が展開されている。一六〇三年 (万曆三十一) に北京で初刻され、そののち幾度も出版されたもので、明末から清朝期の中国のみならず、江戸期の日本や朝鮮朝にも多大な影響を与えた⁽¹⁾。筆者は本書の成立事情に関して、別稿⁽²⁾において考察を行ったが、本稿ではその成立過程を振り返りながら、出版とそれに関わる幾つかの問題について検討を加え、最後に、出版に際して附された『天主実義』の序文について、現代語訳を試みることにする。

【注釈】

(1) 後藤基巳著『天主実義』(明德出版社「中国古典新書」、一九七二)「解説」、平川祐弘著『マッテオ・リッチ伝』(平凡社「東洋文庫」、一九九七)等を参照。また、日本との関係については、海老沢有道著『天主実義』雑考―特に日本との関連において―(『増訂 切支丹史の研究』所収、新人物往来社、一九七二)を参照。

(2) 拙稿『天主実義』の成立(『哲学年報』第五十一輯、一九九二)。

一 『天主実義』の成立

明末中国の天主教布教において中心的役割を果たした人物が、マテオ・リッチ（一五五二—一六一〇）である。彼はイエズス会士による中国宣教の歩みについて、ヨーロッパの人々に詳細な「報告書」^[1]を書き送っている。『天主実義』成立の事情や目的に関しては、この「報告書」の中に散見する。以下、それらを参考にしながらまとめてみる。

リッチは一五八二年（万曆一〇）に中国本土に入り、本格的な天主教伝道に着手する。彼らイエズス会士が最初に出版した教理書は、「十誠」の中国語訳であった（一五八二—一五八四、「報告書」第二の書・第四章）。そして、より体系的な教理書として編集されたのが、中国文によるカテキズム、『天主実録』である。この書は、リッチの先輩であるミケレ・ルツジェリ（中国名は羅明堅、一五四三—一六〇七）の手によって作られ、一五八四年（万曆一二）八月に自序が書かれる。リッチによれば、それは「チーナの諸宗派のいくつかの問題点を論破し、聖なる信仰の主要な点、とくに天性の光によって容易に理解できるところについて説明」したものであった（「報告書」第二の書・第四章）。この書物によって、「キリスト教の名前はまたたくまに遠方まで広まった」（同上）と言う。またリッチは、「この王国では文字が大きな力をもっているので、わたしたちの問題は話すよりも文字にした方がいっそう明確になった」（同上）と述べている。このように中国文による書物の力を確信したリッチらは、これ以後宗教的なものに限らず、西洋文化に関する様々な内容の書籍の出版を行っていく。

しかし、やがて『天主実録』には幾つかの問題点があることが明らかになってくる。入華当初、イエズス会士らは仏教僧のような格好をしており、『天主実録』も「天竺国僧輯」と称していた。その後、彼らは儒教の立場に近づき、仏教を攻撃する姿勢を明確にしており、こうした表現は都合の悪いものであった（「報告書」第三の書・第十三章）。内容的にも、カテキズムの全体を過不足なく伝えるものとしては質量共に不十分であった。このような理由から、や

がて『天主実録』は使われなくなっていく。それに伴い、リッチは新たなカテキズムの作成に着手する。その結果作られたものが、より完全なカテキズムとしての『天主教要』であり、今一つが『天主実義』である（第五の書・第二章）。西来の天主教に対しては、中国人から様々な疑問や質問が投げかけられたわけであり、『天主実録』にもそうした内容が幾つかは盛り込まれていたが、そのような問いかけに対する説明も含めて、必ずしも十分なものではなかった。また、中国人の宗教や思想などを十分に踏まえた形での対話とは言い難かった。リッチの『天主実義』執筆のねらいは、まさにその点にあった。実際の対話を踏まえながら、中国人の関心や意識に即した、真に中国人向けの天主教解説書を作成しようとしたのである。入華から十年以上が経ち、広東から江西へと次第に伝道範囲が広がっていく一五九四年（万曆二二）頃から、『天主実義』の執筆は開始されたようである。

一六〇一年（万曆二九）に書かれた馮応京の「天主実義序」には、「『天主実義』は、ヨーロッパの利瑪竇先生と、同郷の耶蘇会士方が、我が中国人と行った問答の文章である」と見える。また、リッチ自身出版に際して著した「天主実義引」の中で、「〔そこで〕私は中国の士人が私たちに質問をしたことに答えた内容を記述して、一部の書物を作った」と述べている。これらによれば、明らかにリッチら西洋人修道士と中国人との実際の問答が基になっていると言える。その内容を主題ごとに整理し、中士と西士との問答の形に編集し直したものが『天主実義』なのである。

南昌へと歩を進めた一五九六年（万曆二四）頃、『天主実義』の一応の稿本が完成する。これに伴って、『天主実録』の版本は破棄される。稿本完成後、出版許可を申請する傍ら、推敲と補訂がさらになされたようである。たとえば、一五九九年（万曆二七）、リッチは南京において三准和尚（雪浪）と天主や人性をめぐる論争を行うが、その後、仏教に対する批判を論文に仕上げ、『天主実義』のある章に収めた、と記している（「報告書」第四の書・第七章）。また、リッチが一六〇二年九月二日付けでロンゴバルド（龍華民）に宛てた書簡の中には、『天主実義』の稿本がリッチの友人である一高官の手で推敲されたということが記されている。⁽²⁾

一六〇一年（万曆二九）正月、稿本を読んだ馮応京（一五五五—一六〇六）が感動して「天主実義序」を著し、リッチに出版を促したが、ゴアの異端審問官からの出版の認可が下りていなかったため、出版を見送っている（「報告書」第四の書・第一章）。

やがて審問官から出版許可が下り、一六〇三年（万曆三一）、ようやく北京において刊行の運びとなる。リッチの自序である「天主実義引」は、七月十六日付けで書かれている。完成した『天主実義』第三篇の冒頭部分は、『畸人十篇』第二篇前半の馮琦の言によっているが、後者ではその後には彼が病没したことが記されている。病没は一六〇三年二月である。このことから、出版直前まで増補・修訂が行われたことが分かる^③。

以上のように、『天主実義』編述の動機・目的とその成立過程について見てきた。次にその内容を見ながら、リッチの執筆意図について改めて考えてみることにする。『天主実義』は上下二巻、全八篇から成るが、各篇の篇目を訳せば、以下の通りである。

上 卷

首 篇 天主が天地万物を創造して、それらを主宰し維持することを論じる。

第二篇 天主に関する世間の人々の誤解を解明する。

第三篇 人の魂は不滅であり、鳥獣とは全く異なるということを論じる。

第四篇 鬼神と人の魂とは異なるということを分析し、この世の万物は一体とは言えないということを解明する。

下 卷

第五篇 輪廻六道や戒殺生といった誤謬の説を論駁して、齋戒の正しい目的を示す。

第六篇 意志はなくすことができないうことを説明し、さらに死後には天国と地獄の賞罰が必ずあり、世間の人々の善悪の行為に報いるということを論じる。

第七篇 人の本性が本来善であるということを論じ、天主教徒の正しい学問について述べる。

第八篇 西洋の風俗を概説して、修道士が独身である理由を論じ、更に天主が西方に降誕した由来について説明する。

各篇目を一見して分かるように、上巻は基本篇、下巻は展開篇とも言える。上巻の首篇・第二篇では「天主」が問題にされ、第三篇と第四篇では人間の「靈魂」が取り上げられている。つまり、上巻では天主と人間に関する基本的な考え方について、中士と西士との間で議論がなされている。下巻では、それを踏まえながら倫理的諸問題について取り上げている。殊に死後の天堂と地獄というものを前提にして、人はいかに生きるべきかという問題が、様々な角度から議論されていると言える。リッチ自身、本書の内容と論述方法について、「報告書」の第五の書・第二章で次のように述べている。

それはわたしたちの聖なる信仰の神秘をすべて論じたものではなかった。そういう事柄は受洗志願者や信者だけに明かすべきことだったからだ。そこには、いくつかの重要な神秘だけが、とりわけ生得の理性で証明できるものや、自然の光で理解できるものだけが、論じられていた。それならば、キリスト教徒にも異教徒にも役に立つし、わたしたちがすぐには行けない遠隔の地でも理解され、それによって、信仰や啓示を受けた科学を必要とする他の神秘へ進む道も開けるからだだった。それはたとえば、天地にはあらゆる事物の主であり創造主である者が存在し、たえず事物を維持しているとか、人間の魂は不滅であり、その善悪の行ないは来世において神の報いを受けるとか、魂が他人の肉体や他の動物の体に転移するというのは、当地には信奉する者も多いが、偽りであるとか、その他、それに類することであった。神父はこういうもろもろの事柄を、わたしたちの教会博士のさまざまな説明や議論を引用しながら証明する一方で、この国の古い書物を読んだ折に書き留めておいた多くの権威ある言説をつかって証明した。それゆえ、この著作は大きな権威と信用を獲得した。

『天主実義』は、天主教の教理のすべてをカバーしたのではなく、またそのことを目的としたものでもなかった。天主教受容（受洗）を前提としたものではなく、それはあくまでも理性で証明・納得できる内容であり、異教徒が理解するのに有益なものとして著されたものである。そのために、中国の古典の言葉をも援用したのである。『天主実義』は一般の中国人（と言っても、一定レベルの知識と関心を持つ）に対して、彼らの抱く疑問や関心に答えるべく著された書物であり、中国古典の引用もリッチが意図的に行ったものであった。

【注釈】

- (1) Matteo Ricci, *Della entrata della compagnia di Gesù e christianità nella Cina*. 邦訳は、川名公平訳『中国キリスト教布教史 一・二』（岩波書店『大航海時代叢書』第II期、第八・九卷所収、一九八二・一九八三）。本稿における該書からの引用はすべてこれに依った（以下、「報告書」と略す）。
- (2) P. Tacchi-Venturi 編 *Opere Storiche del P. Matteo Ricci* 所収。『利瑪竇全集 4・利瑪竇書信集《下》』（羅漁訳、光啓出版社、一九八六）を参照。従来、この高官を徐光啓とする説が多い。平川祐弘『マッテオ・リッチ伝 2』一六一―一八頁、海老沢有道前掲書（二八八頁）等。しかし、リッチの「報告書」第四の書・第一章によれば、徐光啓は一六〇〇年に南京でリッチを訪ね天主教の話を知っているが、この時点で特別な関心を抱いてはいない。その後、リッチは北京に行っており、徐光啓との接触はなかったようである。しかし、彼は一六〇三年の始め（旧暦では前年の歳末）に南京の教堂でジョアン・デ・ローチャ（羅如望）から話を聞き、彼から『天主実義』及び『天主教要』の写本を借りて読み、受洗への意志を強め、さらに教理を学んだ後に洗礼を受ける（二月十一日）。従って一六〇二年九月の時点で、リッチが「高官である友人によって改訂・増補がなされた」と言っている、その人物が徐光啓であると思われることには無理があると言えよう。筆者は、一六〇一年に「天主実義序」を著し、リッチに出版を促した馮応京が、この人物ではないかと推定する。
- (3) 後藤基巳訳注『天主実義』の「解説」（一九―二二頁）を参照。後藤氏は、そのほか『畸人十篇』の内容のうち、一六〇三年以前の対談と推定される各篇の文章と『天主実義』との間には、数箇所にわたる重複が見られると指摘している。

二 『天主実義』の版本(1) 明末

『天主実義』は一六〇三年(万曆三二)、北京において初刻される⁽¹⁾。巻首に馮応京の「天主実義序」とリッチ自身の「天主実義引」が収められる。馮応京の序文は一年前に書かれていたものであるが、リッチによれば、「高雅な文章と深い学識によって偶像教を激しく非難し、わたしたちのキリスト教を称揚した」⁽²⁾ものである。そしてリッチは、「それ以来いまに到るまで、この著作はその序文のおかげで大きな権威を持つようになった」⁽³⁾と述べている。

続いて一六〇五年(萬曆三三)、韶州(広東)において重刻される。これが日本向けの出版と称されるものである。リッチは一六〇八年三月八日付けのイエズス会総長宛書簡の中で、中国文で書かれた書籍は日本においてもよい効果を収めると判断したヴァリニャーノが、この書物を日本に送るために広東で新たに印刷させた、と述べている⁽⁴⁾。この広東版は、現在、内閣文庫や蓬左文庫に所蔵される版本と考えられる⁽⁵⁾。巻首に「天主実義序」と「天主実義引」のみが収められ、後年の「重刻序」がなく、しかも校点が行われていることなどから、日本人読者を意識した刊本と推定される。すでに海老沢有道氏が指摘しているように、「日本語に翻訳された」と見る考え方が誤っていることは、言うまでもない⁽⁶⁾。

次いで一六〇七年(萬曆三五)、『天主実義』は杭州(浙江)において李之藻の友人である汪汝淳の手によって重刻される⁽⁷⁾。「耶穌会中人 利瑪竇述 燕貽堂較梓」と記され、李之藻の「天主実義重刻序」と汪汝淳の「重刻天主実義跋」が収められている。

一六一〇年(万曆三八)にリッチが北京で亡くなったのち、『天主実義』が重刻されたかどうかは定かでないが、一六二九年(崇禎二)、李之藻が杭州で『天学初函』を編集・出版した際に、収載されることになる。『天学初函』は、マテオ・リッチを始めとするイエズス会士、並びに彼らに協力した中国人天主教徒の手になる書物を集成したもので

ある。理編と器編とに分類され、前者には天主教書・西洋哲学書・教訓書・地理書などが含まれ、後者には天文学・測量・数学などに関する書物が収められた。⁽⁸⁾ 理編に収められた書籍を挙げれば次の通りである。

『西学凡』一巻

艾儒略 答述

『景教流行中国碑頌并序』

景 浄 述

『崎人十篇』二巻

利瑪竇 述

『交友論』一巻

利瑪竇 撰

『二十五言』一巻

利瑪竇 述

『天主実義』二巻

利瑪竇 述

『弁学遺牘』一巻

利瑪竇 撰

『七克』七巻

龐迪我 述

『靈言蠡勺』二巻

畢方濟 口授、徐光啓 筆録

『職方外紀』五巻

艾儒略 増訳、楊廷筠 彙記

この中で、『天主実義』に関しては新たに刊刻することはせずに、燕貽堂版の『天主実義』を収めている。燕貽堂較梓版が杭州で出版されたことによると考えられる。『天学初函』はその後も重刻されたようである。⁽⁹⁾

【注釈】

(1) 本書の初刻について、海老沢有道氏は前掲書において、「その初版としてテリアは広東の燕貽堂版を示すが、北京の欽一堂版であることはまず疑いを容れない」(二八八頁)と述べているが、後述するように、「燕貽堂版」は杭州において、「欽一堂版」は「閩中」すなわち福建において出版されたものであり、初刻が北京でなされたことは、リッチの「報告書」から推定できる。

- (2) リッチの「報告書」第四の書・第一章。
- (3) 同上。
- (4) 本稿前節の「注釈」(2)所掲書所収。また、海老沢有道氏の前掲書(二九二頁)を参照。
- (5) 内閣文庫所蔵本(三〇七—一一二)は二冊で、目録には「明刊本」とある。「耶穌会中人利瑪竇述」とあり、本文は毎半葉十行、行二十字で、後の燕貽堂較梓本とは異なる。巻首に「天主実義序」と「天主実義引」が収められている。蓬左文庫所蔵本(二五八—四一五)も同本である。但し、この本の題簽には、「大西問答上」、「大西問答下」と墨書されている。
- (6) 海老沢有道氏の前掲書(二九二頁)を参照。
- (7) リッチは「報告書」第五の書・第二章の中で、「この章を書いている時点(一六〇九年)では、この本はすでにあちこちの省で四度も版を重ねており、そのうちの二度はキリスト教徒によるものではなく、正しく生きてゆくのに有益だと考えた異教徒自身の手によるものだ」と述べているから、北京初刻以後、韶州、杭州以外にも一度出版がなされたようである。リッチは一六〇八年三月八日付けのイエズス会総長宛書簡の中で、李之藻が杭州で『天主実義』を出版した(一六〇七年)ことに触れ、彼は過去にも北京でこの書を出版した、と述べていることから、あるいは李之藻が北京で重刻したものがそれであったのかも知れない。李之藻の受洗は一六一〇年のことであるから、「報告書」に見える「異教徒の手による二度の出版」は、李之藻を指したものと十分に考えられる。
- (8) 李之藻が著した「天学初函題辞」については、拙稿「明末天主教思想研究序説——西学凡」の天学概念をめぐって——(福岡教育大学紀要)第三十五号、一九八六)を参照。
- (9) 蓬左文庫蔵の『天学初函』(一七二—一七三)所収の『天主実義』には、巻首に「天主実義重刻序」、「天主実義引」が、下巻末尾に「重刻天主実義跋」(万曆三十五年、汪汝淳)が収められる。本文は毎半葉九行、行二十字である。以下の諸本も同様である。

東洋文庫蔵の『天学初函』(V—五・A—二八、帙の題簽「理篇五種・器篇四種」)十冊の第四・五冊の『天主実義』は、巻首に「天主実義重刻序」、「天主実義引」、「重刻天主実義跋」を収める。また同十冊(同分数番号、同「理篇」)の第三・四冊の『天主実義』は、巻首に「天主実義重刻序」、「天主実義引」のみを収める。

影印版『天学初函』(台湾学生書局、「中国史学叢書」、一九六五)第一冊所収の『天主実義』は、巻首に「天主実義序」、「天主実義重刻序」、「天主実義引」の順に収める。また影印版『天主実義(影印明版真本)』(台湾・国防研究院・中華大典編纂委員会、一九六七)は、巻首に「天主実義校勘記(代序)」を載せ、以下同様である。「The True Idea of God」という英文題名を記す。なお、『天学初函』に関しては、方豪氏の「李之藻輯刻天学初函考——李之藻誕生四百年紀年論文」(台湾学生書局『天学初函』第一冊所収)を

参照。

三 『天主実義』の版本(2) 清代

清朝成立後もイエズス会士らカトリック修道士たちは中国に在任して活動を続けた。殊にアダム・シャルル(中国名は湯若望、一五九一―一六六六)は欽天監を統括して、西洋天文学に基づく事憲曆(事憲書)を発行する。この改曆は保守派の猛反撃を受けたりするが、康熙朝においては西洋の天文や数理の学問が当時の学者に大きな影響を与えた。西洋科学に強く引かれた康熙帝は、キリスト教にも関心を持ち、リッチの『天主実義』に対しても特別の敬意を表したと言われる。⁽¹⁾一六九二年(康熙三二)には、康熙帝によって天主教の公許がなされる。しかし、この時期、天主教の布教方針をめぐっては、ローマ教皇庁、イエズス会、及び清朝皇帝との間に次第に軋轢を生じることになる。所謂「典礼問題(典礼論争)」の発生である。⁽²⁾

従来リッチらは、中国人信徒が天や祖先あるいは孔子を祭ったりすることを許容していた。この順応方法に対しては、イエズス会の内部でも否定的見解があったが、特にイエズス会に遅れて入華したフランシスコ会やドミニコ会などから、厳しい批判がなされる。こうした動きを受けて、一六四五年(順治二)に、教皇インノケンティウス十世は中国人信徒の伝統儀礼(典礼)参加を禁止する勅令を出したが、イエズス会の反対にあつて、一六五六年(順治一三)に教皇アレクサンデル七世はこれを廃止した。しかし、その後中国に進出したパリ外国宣教会がイエズス会の方針を徹底的に批判したことから、この問題をめぐる論争と対立は激化した。教皇クレメンス十一世は、一七〇四年(康熙四三)と一七一〇年(康熙四九)に、信者の伝統儀礼を禁止する勅令を出す。さらに一七一五年(康熙五四)には「大勅書」を発し、典礼に関する禁止条項を徹底させる姿勢を表明した。教皇庁使節のもたらしたこの「禁約」の内容に激怒した康熙帝は、一七一七年(康熙五六)、ついに中国における天主教布教を禁止する措置に出る。続いて一七二三

年（雍正元）には、雍正帝が天主教禁止の詔を出し、福建における迫害も発生する。こうした流れの中で、一七四二年（乾隆七）に、教皇ベネディクトゥス十三世は宣教師に対して、布教地における一切の順応方法を禁止する。やがて、一七七三年（乾隆三八）には教皇クレメンス十四世によってイエズス会の解散が命じられることにもなる。

このように、典礼論争から禁教へと進んでいく時代において、『天主実義』の出版がどのような行われたかは、必ずしも詳らかではない。ただ、『天主実義』においてマテオ・リッチが切り開こうとした中・西対話の方法が次第に狭められる方向に向かったことは確かである。³⁾ 康熙年間における反イエズス会の急先鋒であったシャルル・メグロ（パリ外国宣教会の福建代牧）が出した「教書」（一六九三年・康熙三二）は、次のようなことを主張している。「天主」という言葉のみを使用すべきで、「天」や「上帝」という表現をすべきではない。教堂に「敬天」という扁額を掲げるところを禁止する。孔子や死者への典礼を認めない。「中国人が信奉する哲学はキリスト教に背馳するものではない」などといった誤った提言をすることを禁止する。これらの主張は、言うまでもなく中国布教に当たったリッチの考え方と決定的に齟齬を来すものであり、『天主実義』の出版にもやがて重大な影響を及ぼすことになる。

ところで、一七八二年（乾隆四七）に完成した『四庫全書』の編纂においては、『天学初函』の器編所収書がすべて収蔵されたのに対して、理編からは『職方外紀』のみが収載され、その他は「存目」の扱いを受けている。『天学初函』の「提要」（卷一三四・子部・雜家類存目十一）に、「西学の長所は測算にあり、その短所は天主を崇拜して人心を眩惑させる点にある」とあるのが、『四庫全書』の基本的な見方と言えらる。『天主実義』は『四庫全書総目提要』卷一三五の「子部・雜家類存目」に収められている。「提要」では、八篇の篇目を列記したあとに、次のようにだけ記している（「」内は筆者が補う）。

〔本書の〕大旨は、人々が天主を尊信して、その教えを實行するようになさせるものである。〔著者の利瑪竇は〕儒教が攻撃できないものだとなつて、六経の中の上帝の説を天主に合致するものと附会して、殊に仏教を攻撃

して打ち負かそうとした。しかし、「本書で説いている」天堂・地獄の説は、「仏教で説く」輪廻の説と大差はない。ただ、少し仏教の説を改変しているだけで、本質は同一である⁽⁴⁾。

さて、中国におけるカトリック布教は、一九世紀中期以降に本格的に再開する。一八一四年に復興したイエズス会もこれに加わる。これに伴って、『天主実義』も再び中国において出版されることになる。一八六八年(同治七)の上海土山湾慈母堂蔵版『天主実義』がそれである。「降生一千八百六十八年重刊 慈母堂蔵板」と記され、「主教趙方濟准」とある。巻首に、「天主実義重刻序」、「天主実義序」、「天主実義引」が掲げられ、上・下巻の巻首にそれぞれ「目錄」が置かれている。内題の次行に「耶穌会士利瑪竇述」と記されており、明らかに明本の「耶穌会中人利瑪竇述」を意識的に改めたものである。この表記のみならず、慈母堂蔵版は、その表現方法において、一八世紀教皇庁の反イエズス会布教方針を完璧に生かしたものになっている。すなわち、中国人の伝統的風俗や信仰に歩み寄った形での表現方法を改めるやり方である。イエズス会は一度修道会解散の憂き目に会っており、ここに至って方向修正を余儀なくされたと言える。かくして、マテオ・リッチの著した『天主実義』の表記の抜本的改竄が行われたのである。この文字の改変に関しては、既に方豪氏に詳細な考証がある⁽⁵⁾。最も重大な改変は、「上帝」という表現を「天主」「上主」というような語に書き換えた点である。文字改変の具体例を方豪氏により以下に幾つか挙げてみる。

燕貽堂版(明本)	慈母堂版(清本)	事例数
上帝	天主	46
上帝	上主	16
上帝	主宰	2
上帝	大主	2
上帝	吾主	2

上帝	真主	1
天主上帝	天主	1
天主上帝	天地主宰	1
天帝	天主	1
后帝	主宰	1
天	天主	1
先天	天主	1
畏天	敬畏	1
昭事上帝	人生昭事	1
事上帝	昭事	2

このように、慈母堂蔵版の『天主実義』は、マテオ・リッチが苦心した表現をことごとく改変したものであり、今日、原典を正しく理解するためにはもちろん明本にさかのぼって見る必要がある。ただ、この慈母堂蔵版の特色は、校点を施したことと、本文欄外に内容小見出しを付け、各巻の目録においてもその小見出しを列挙したことである。これによって『天主実義』が一般の人々に読みやすくなり、内容理解を助けるものになったことは確かである。上巻首篇の目次を以下に挙げる。なお、見出し語の下に「二篇」「三篇」などとあるのは、「二丁」「三丁」（丁数）のことである。

首篇論天主始制天地万物而主宰安養之

人能推理别于禽獸二篇

天地有主宰以理数端徴之二篇

一以良能徵三篇

一以天動徵三篇

一以鳥獸作動徵三篇

一以物不能自成徵四篇

一以物次序安排徵四篇

一以物始生伝類徵六篇

天主無始無終六篇

天主如何生万物六篇

物所以然有四七篇

天主為物宗之所以然七篇

天主惟一尊八篇

天主無窮難測八篇

天主本性超越万物之品十篇

これ以降、一九世紀末から二〇世紀にかけて多くの出版がなされるが、基本的にはこの慈母堂蔵版、つまり改竄本が基になっていく。筆者が目撃したもの、及び前掲の方豪氏等を参考にすれば、以下のような版本や活字本が挙げられる。

一八六八年（同治 七年） 上海土山湾慈母堂版^⑥

一八九四年（光緒二〇年） 香港納^ナ匝^ザ肋^レ静院活字版^⑦

一八九八年（光緒二四年） 河北献県勝世堂版

- 一九〇四年（光緒三〇年） 上海土山湾慈母堂活字版
一九三〇年（民国一九年） 上海土山湾印書館第五版⁽⁸⁾
一九三三年（民国二二年） 河北獻県勝世堂重版
一九三五年（民国二四年） 上海土山湾印書館第六版⁽⁹⁾
一九三八年（民国二七年） 河北獻県勝世堂重版
山東兗州版
一九三九年（民国二八年） 香港納匝肋静院版⁽¹⁰⁾
一九四一年（民国三〇年） 天津崇徳堂版⁽¹¹⁾
- この他に、刊年未詳だが、福建欽一堂蔵版⁽¹²⁾、北平西什庫救世堂版、重慶聖家堂版などが存在する。

【注釈】

- (1) ジョアシャン・ブーヴェ（中国名は白晋、一六五六—一七三〇）著『康熙帝伝』（一六九七年。後藤末雄訳、平凡社「東洋文庫」、一九七〇）一一一頁を参照。
- (2) 典礼問題の歴史的展開については、矢沢利彦著『中国とキリスト教』（近藤出版社、一九七二）を参照した。
- (3) 前掲『康熙帝伝』を著したフランスのイエズス会士ブーヴェは、同書の中で、「キリスト教の本義は儒教の本義と乖離しないのであります」（同訳書一四二頁）と述べ、「耶蘇会士リッチ師の名著『天主実義』の中にはこの問題が根本的に論議されております」（同一四三頁）と述べている。このような立場が否定される方向へと向かったのである。
- (4) 大旨主於使人尊信天主以行其教。知儒教之不可攻、則附会六经中上帝之説以合於天主、而特攻积氏以求勝。然天堂地獄之説與輪廻之説相去無幾。特小変积氏之説、而本原則一耳。
- (5) 方豪著「『天主実義』之改竄」（『方豪六十自定稿』下冊、台湾学生書局、一九六九）を参照。この中で、慈母堂蔵本の改竄の他、光緒三十年の慈母堂活字本（今本と称す）や明版（天学初函本）の誤字も指摘している。

- (6) 日本では、静嘉堂文庫、京都大学文学部、同人文科学研究所、九州大学附属図書館等に所蔵。最も一般に流布している。
- (7) 筆者は、韓国金州市・湖南教会史研究所にて閲覧した。
- (8) 東京大学東洋文化研究所に所蔵。「南京主教姚重准」とある。
- (9) 台湾・輔仁大学に所蔵。
- (10) 台湾・中央研究院・傅斯年図書館に所蔵。
- (11) 台湾・輔仁大学に所蔵。
- (12) 内閣文庫所蔵本(三〇七—九八)。「西国利先生著 天学実義 欽一堂藏板」とあり。二冊。第一丁の内題次行に「耶穌会士利瑪竇 述 閩中欽一堂梓」とある。「天主実義序」「天主実義重刻序」「天主実義引」(每半葉八行、行十五字)の後に、「天学実義目錄」が附されている。また、東京大学総合図書館に、同本による写本が所蔵されている。東洋文庫所蔵の『天学初函』本との校勘を記した後藤基巳氏のメモが扉内袋に収納されている。さらに、国際基督教大学図書館にも、同本による写本が所蔵されている。「光霽書屋」の便箋を使用。本文欄外に、「人須認己本原归宿」(1a)、「人所異於禽獸者要在論理」(1b)などあり、慈母堂藏版の小見出しとは異なっている。

四 『天主実義』の翻訳

『天主実義』の翻訳本を、管見の及ぶもののみ以下に挙げる。この他に、フランス語、ヴェトナム語等の翻訳本があるという。

- (1) 小島準治訓点『天主実義』(東京開世堂、一八八五)
- 国立国会図書館蔵。洋装二冊の活字本。「公教会博士利瑪竇述」「日本 小島準治訓点」とある。上海慈母堂蔵版に依り、句点を打ち、返り点と送りがなを施したものである。『天主実義』全文に訓点を施したものである。今日まで唯一のものである。
- (2) 劉順徳訳註『言文対照 天主実義』(台湾光啓出版社、一九六六)

巻頭に、「天主実義校勘記（代序）」（顧保鵠）、「天主実義訳註序」（劉順徳）が置かれているが、原序は訳出されていない。本文は、「天主実義 語体」として口語訳がなされ、細かい見出しが施されている。また、各篇の冒頭に「本篇要旨」が掲げられ、短い解説がなされる。さらに、首篇・第二篇・第四篇には篇末に「附註」が施されている。その他、「語体」の終わりに、「附録：『天主実義』総習題」として各篇の内容に関する四十七の「習題」と、全体に関する七つの「自動研究題」が収められている。巻末に燕貽堂較梓本の影印がある。なお、「THE TRUE IDEA OF GOD」という英文題名が記されている。

- (3) 李秀雄訳『天主実義』（西江大学校神学研究所編、神学叢書第二十三卷、プンド出版社、一九八四）
訳者の「天主実義訳序」に続いて、「天主実義引」と本文のハングル訳のみが収められている。

- (4) 宋栄培等訳『천주실의』（ソウル大学校出版会、一九九九）

原文を短く章句に切りながら、逐語的にハングル訳を施している。巻首に「天主実義序」、「天主実義重刻序」、「天主実義引」を、巻末に汪汝淳の「重刻天主実義跋」と、朝鮮の李瀾（号は星湖、一六八一—一七六三）の「跋天主実義」を収める。また、『天学初函』本、香港本（一九〇四）、上海本（一九三五）、英訳本（一九八五）を対校した校勘表と原文が掲げられ、末尾には主要語句の索引が附せられている。

- (5) 馬愛徳主編、藍克実・胡国楨訳註『THE TRUE MEANING OF THE LORD OF HEAVEN』（The Institute of Jesuit Source St.Louis, 一九八五）

巻頭に訳者の序論（解説）を掲げ、本文は、左頁に原文、右頁に英訳文を載せる。原文の下部に若干の語注が施されている。また、巻末附録として「リッチのラテン語による要約」、並びに参考文献と書名索引が附せられている。

- (6) 佐伯好郎著『支那基督教の研究3』（春秋社、一九四四）

本書（第三篇 明時代の支那基督教）の約六分の一を、「第七章 利瑪竇著『天主実義』とその解説」に割り、「天主実義」全篇にわたる詳細な内容紹介を行っている。もちろん正確な現代語訳ではない。

(7) 後藤基已著『天主実義』（『中国古典新書』明德出版社、一九七二）

巻頭に解説を附し、本文は全八篇の抄訳である。書き下し文、原文（句読点、返り点を付す）、語注、現代語訳が記されている。『天主実義』を「中国古典」の一冊として取り上げた画期的な書物と言える。

(8) 柴田篤著『天主実義』の研究（一）（五）（『哲学年報』第五四―五七、五九、一九九五―一九九八、二〇〇〇）
 首篇から第五篇まで、全文の現代語訳に語注が附されている。

五 『天主実義』の序文―現代語訳―

以下には、『天主実義』の初刻に当たって附せられた次の二つの序文を現代語訳して載せる。

(1) 一六〇一年（万曆二十九年）一月に、未刻の状態で馮応京が書いた「天主実義序」。

(2) 一六〇三年（万曆三十一年）七月に、北京での出版に当たって利瑪竇が記した「天主実義引」。

〔凡例〕

- 一 底本としては、明の李之藻が編纂した『天学初函』（二六二九年年刊）理編所収本（燕貽堂較梓版）を用いた。
- 一 底本の文字の誤りについては、方豪著『天主実義』の改竄（『方豪六十自定稿』下冊）等を参考にして、これを改めた。但し、後世の改竄本との異同については触れていない。
- 一 原文にはないが、読みやすいように適宜改行を施した。
- 一 訳文はできるだけ平易な現代語表記を心掛けた。「」内は原文にない語句を補ったところを、「（）」内は語

句の簡単な説明を施したところを、それぞれ示した。

一 訳文中、キリスト教で説く「神」については、「天主」という訳語で統一した。但し原文に「天主」とないものについては、原文を（ ）で示した。

一 利瑪竇独特の用語や用法などは、注で原文を示した。

一 注に引用する『新約聖書』の語は、『聖書 新共同訳』（日本聖書協会発行、一九八七）に依った。また、同じくマテオ・リツチの『報告書』は、川名公平氏訳『中国キリスト教布教史一・二』（岩波書店『大航海時代叢書』第Ⅱ期、第八・九卷所収、一九八二・一九八三）に依った。

(1) 「天主実義序」（馮応京撰）

『天主実義』は、ヨーロッパの利瑪竇先生⁽¹⁾と、同郷の耶穌会士⁽²⁾方が、我が中国人と行った問答の文章である。「天主」とは何か。上帝のことである。⁽³⁾「実」というのは空虚ではないということである。我が国の六経⁽⁴⁾や四書⁽⁵⁾においては、代々の聖人や賢人が、「上帝を畏れる⁽⁶⁾」、「上帝を助ける⁽⁷⁾」、「上帝に仕える⁽⁸⁾」、「上帝に至る⁽⁹⁾」と述べておられる。一体誰が「これら聖賢の教えを」空虚な説とみなすことができようか。

後漢の明帝がインドからこの「空虚な」説（仏教）を招き入れたのである。好事家が、「孔子がかつて『西方の聖人』と賞賛したのは、⁽⁹⁾おそらく仏陀のことを言ったのであろう」と説いて、その説をまるで六経に勝るかのように鼓吹した。インドは中国の西にあるが、ヨーロッパはインドの更に西にあるということを知らないのである。仏教は西方からは、世俗の無知なる人々を勧誘したピユタゴラスの言葉を剽窃し、その説を敷衍して輪廻を説き、⁽¹⁰⁾中国からは、万物を芻狗であるとした老子の言葉⁽¹¹⁾を剽窃し、その説を敷衍して寂滅を説いた。「そして」天地四方の世界一切を塵や芥と見なし、ただちにこれらの世界を超脱することを高尚なことだとした。

中国では、聖人も遙かに遠ざかり、その言葉も埋もれてしまい、仏教徒の心を服従させ、その勢いを阻む者はほとんどいない。さらに、内面的にはゆったりとして静かな快適さを願うが、外面的には果てしなく広く大きな奇抜なものにあこがれ、生きている時には名利に奔走する苦勞を厭うが、死んでからは六道を輪廻する苦勞を怖れる。古代は疲れ果てると天に助けを求めたが、現代は仏陀を呼び求める。古代は天地や土地・五穀の神、山川や祖先の廟を祀ったが、現代は仏陀を祀っている。古代の学ぶ者は天を知り、天に順ったが、現代では仏陀を念じて仏陀になろうとしている。古代の仕える者は「天下を治める」天の働きを慎しみ明らかにして、自分勝手に休んだり怠けたりして、人民に何の利益も与えないというようなことはしなかったが、現代においては、朝廷に隠れているか、「さもなければ」禪門に逃れて世間から遊離している。

そもそも仏陀はインドの君王・教師である。我が国には元来君王・教師がおられた。三皇（伏羲・神農・女媧）・五帝（黄帝・顓頊・帝嚳・堯・舜）・三王（夏の禹王・殷の湯王・周の文王）・周公・孔子、及び我が明王朝の太祖以来の天子がすべてそうである。インドの君王・教師「である仏陀」は、天を侮あなどつてその上に自説を凌駕させるが、我が中国の君王・教師「である聖人」は、天を継いでその下に規範を立てた。インドにおいて「人々が」仏陀に従うのを咎めはしないが、しかし中国において「人々が聖人から」学んだことを捨てて仏陀に従うというのは、一体どういうことであろうか。程伊川は、「儒者は天に基づき、仏者は心に基づく」と述べた¹⁵。心を規範とするのと天を規範とするのでは、私欲が有るのと無いのとの違いがある。この両者「の違い」によってその「人の」志を見分けることができる。

この書物は、我が「国の」六経の語句を次々に引用して、その説が真実であることを証明し、空虚を語る説の誤りを批判している。西方の「ヨーロッパの」説によって、西方の「インドの」説を正し、中国の「六経の」説によって、中国「の人々」を教化するものであり、次のように述べている。「人が人倫を捨て事物を排して、執着もなければ汚染

もされないともやみに言うのは、要するに輪廻を断ち切ろうとするものである。だから、輪廻〔の説〕がでたらめであるのはきわめて明白である。我が身のことばかりに知力を尽くし、体の内外に境界を設けるのは、要するに自分の親だけを親とし、自分の子だけを子とするものである。だから、天の父が〔分け隔てなく〕公正なものであることは、またきわめて明白である」と。本性については、人は鳥獸と全く異なるものだと言き、⁽¹⁷⁾修養については、欲を去ることに始まり、仁を行うことに終わると説いている。⁽¹⁸⁾時として中国においては聞いたことがなかったり、聞いてはいても努力をしていないことが、十のうちの九つはある。

利先生は八万里も世界を巡り、天の高みを窮め、地の深みを窮めて、いささかも違うことがない。私が窮めたこともない事柄をすでに窮めて、確固たる根拠があるのだから、その神妙な道理は受け取るべきであって、無視することはできないのである。我々は〔その聞いたことのない説については〕そのまま受けとめるだけで取り上げて論じることとはせず、取り上げて論じて判明を下すことはしない。〔また〕聞いてはいても努力をしていないことについては、はっと悟り、慎んで思い、懸命に努力しないでよいだろうか。私は年老いて広い地域に出かけることもできず、知識も井戸の中から天を見上げるほどの狭いものであるが、〔あの仏教の〕空虚な説の弊害を目の当たり^あにして、あの方〔利先生〕が真実を語られるのを〔心から〕喜ぶものである。謹んでこの書のはじめに記し、真理に到達した方〔利先生〕と共に〔真理を〕究めんとするものである。

万曆二十九年正月吉日⁽¹⁹⁾ 後学の馮応京⁽²⁰⁾が謹んで序す。

【注釈】

- (1) 原文には「大西国利子」とある。利瑪竇はイタリア人であるマテオ・リッチ (Matteo Ricci, 一五五二—一六一〇) の中国名。
- (2) 原文には「其郷会友」とある。イグナチオ・ロヨラらによって創立されたカトリック修道会であるイエズス会 (耶穌会) の会士で、

中国に渡来した者を指す。リッチと同時期の入華イエズス会士はイタリア人が多いが、ポルトガルやスペイン出身者もいた。

- (3) 上帝とは、中国古代の人々が尊崇した、天地・自然・人事万般を支配する天上の至高者のこと。『天主実義』第二篇の28に西士の言葉として、「我々の天主は、〔中国〕古代の経書で上帝と呼ばれているものです」とある。

- (4) 六経は、詩・書・礼・楽・易・春秋の六つの経書のこと。ただし六経のうち、楽は書物として伝わらず、後世では、『易经』・『書経』・『詩経』・『礼記』・『春秋』が五経と称される。四書は『大学』・『中庸』・『論語』・『孟子』の四つの書物のこと。『大学』・『中庸』は元来『礼記』の一篇であるが、宋代の朱子学以降、『論語』・『孟子』と併せて「四書」として尊重された。

- (5) 『書経』湯誓篇に、「上帝を畏る」とある。

- (6) 『孟子』梁惠王篇下に、「其れ上帝を助け」とある。『書経』泰誓篇に「克く上帝を相く」とあるのを引用したもの。

- (7) 『書経』泰誓上篇に、「上帝神祇に事え、上帝を敬し」と、また同じく立政篇に、「上帝に敬事す」とある。また、『詩経』大明篇に「上帝に昭事す」とある。

- (8) 『書経』君奭篇に、「上帝に格る」とある。以上の経書からの引用については、『天主実義』第二篇の28を参照。

- (9) 『列子』仲尼篇に、孔子の言葉として「西方の人に聖賢有り。治めずして乱れず、言わずして自ら信ぜられ、化せずして自ら行われ、蕩蕩として民の能く名づくる無し」とある。

- (10) ピュタゴラスは、古代ギリシアの哲学者Pythagorasのこと。原文には「閉他臥刺」とある。『天主実義』第五篇の2を参照。

- (11) 『老子』第五章に「天地は不仁なり。万物を以て芻狗と為す」とある。芻狗とはわらで作った犬で、祭事が終わると捨てられることから、用事が済めば捨てられること。

- (12) 『孟子』尽心篇上に、「其の心を尽くす者は其の性を知るなり。其の性を知れば則ち天を知るなり」とある。また、『周易』革卦に、「湯武、命を革め、天に順いて人に応ず」とある。

- (13) 原文には「寅亮天工」とある。『書経』周官篇に、「天地を寅亮す」と見える。

- (14) 原文には「自暇自逸」とある。『春秋左氏伝』襄公十八年に、「人、不穀（不善）なるを以て自逸して先君の業を忘るるを為すなり」とある。

- (15) 程伊川は北宋の儒者である程頤（一〇三三―一一〇七）のこと。『二程遺書』卷二二に、「聖人は天に本づき、釈氏は心に本づく」とある。

- (16) 『天主実義』には随所に五経からの引用が見られるが、特に第二篇の28、第四篇の2、第六篇の10では集中的に引用されている。

- (17) 『天主実義』第二篇を参照。

(18) 『天主実義』第六篇を参照。

(19) 原文には「孟春穀旦」とある。万曆二十九年は一六〇一年に当たる。

(20) 馮応京（一五五五—一六〇六）、字は可大、号は慕岡。万曆二〇年の進士で、戸部主事・湖広僉事等になる。利瑪竇らと深い交わりを持つが、洗礼を受ける前に急死したようである。利瑪竇は『報告書』第四の書・第一章の中で、彼について詳しく記しているが、この「天主実義序」については次のように述べている。「わたしたちが最も高く評価したのは、彼の書いた序文だった。後に、それは神父がチーナ語で書いた『公教要理』（『天主実義』）に収めて印刷された。その中で彼は高雅な文章と深い学識によって偶像教を激しく非難し、わたしたちのキリスト教を称揚した。それ以来いまに至るまで、この著作はその序文のおかげで大きな権威を持つようになった。」

(2) 天主実義引（利瑪竇撰）

国や天下を平和に治めるための不変の道理は、ただ一つであるということに尽きる。だから、聖人や賢人は、忠実であることを臣下に対して教えた。忠実であるとは二心がないということである。五倫^①では君主（と臣下との関係）が一番重要なものであり、君臣関係は三綱^②の第一番目である。そもそも正義の士は、これを明らかにし、これを行う。古代において、世の中が乱れ群雄が割拠して本当の君主が定まらない時に、忠義心を抱く者は正統がどこにあるのかを注意深く観察しないことはなかった。だから「正統を継いで王となる者のためには」我が身を捧げて従い、「その心を」決して変えることがなかった。

国に君主がいるのであれば、天地にだけ主宰者がいないということがあるか。国が一人（の君主）によって治められるのに、天地に二人の主宰者がいることがあるか。だから、君子たる者は、天地の根源、造化の根本に対して、これを知り仰ぎ見ないことがあるか。「しかし悪しき」人は法網に反抗し、ありとあらゆる罪を犯し、巧みに世の中を奪い取ってもまだ満足することがなく、天主（天帝）の位を借りてはその上に止まろうとした。ただ、天の高さは

梯はしごを掛けて登ることができず、人の欲望は遂げにくいために、偽って邪説を広めて人々を欺き天主の形跡を見えなくしては、でたらめに、人々が「この世の」幸福と利益を当てにして、それを崇拜し祭祀するようにさせた。思うに、誰も彼もが天主（上帝）に対して罪を犯したのである。だから、天は世々に重く災いを降したのであるが、人々はその理由について考えようとしなかった。ああ、何と哀しいことであるか。盗人を主君と認める者でないと言えようか。聖人が現れることなく、化け物たちがこぞって人々を煽動し、「かくして」誠実の道理はほとんど消滅してしまった。

私は若い時から国を出て広く世界を巡り、こうした害毒があらゆる所に及んでいるのを見た。思うに、堯・舜③の民であり、周公・孔子④の弟子である中国の人々は、天に基づく道理や天に関する学問⑤を修めて、決して「誤った考えに」移り染まるようなことはなかったが、それでも中には「誤った考えに陥ることを」免れない者もいた。私はひそかに彼らのために論証しようと思ったのだが、遠方からの一人旅、言語や文字も中国と異なっているため、口も手も思うに任せない。そのうえ、資質も粗雑であり、明らかにしようと思っても「反対に」ますます暗くしてしまうことを恐れた。長い間、こうした思いに嘆くばかりであった。二十年以上も、朝な夕なに天を仰いでは涙ながらに祈った。天を仰いでは、天主が人民を憐れみ赦されて、必ずや「正しい道理を」明らかにされて、「誤った道理を」正されるであろうことを思った。「ある日」突然、一、二、三の友人が現れて私に語った、「正しい発音を知らなくても、盗みを見たら声を出さないわけにはいきません。その側に憐れみ深く屈強な人物がいたら、声を聞いて立ち上がって攻撃するでしょう」と。「そこで」私は中国の士人が私たちに質問をしたことに対して答えた内容を記述して、一部の書物を作った。

ああ、愚かな者が目で見えないものは存在しないと思うのは、ちょうど目の見えない者が空を見ることができず、空に太陽があることを信じないようなものである。しかし、太陽の光は実在し、目で見ることができなくても、太陽が存在しないとどうして心配しようか。天主の道理は人の心の中に備わっているが、人は自分では気がつかないし、また顧みようともしわないのである。「彼らは」天の主宰者は形体を持たないものではあるが、「それ自身」完全な目

であるから見えないものはなく、完全な耳であるから聞こえないものはなく、完全な足であるから行けないところはない、ということを知らないのである。孝行の子にとっては、両親の恩愛のようなものであり、不肖の子にとっては、官憲や裁判官の威厳のようなものである。およそ善を行う者は、必ず最高に尊い方がこの世界を治めているということとを信じるものである。もし、そのような尊い者など存在しない、かりに存在しても人のことには関与しない、と言うならば、それは善を行う門を閉ざして悪を行う道を大きく開くものでないことがあるか。人々は突然鳴り響く雷の大音声枯木を打ち倒すだけで、不仁者の身には及ばないのを見て、天上には主宰者など存在しないのではないかと疑う。「彼らは」天の罰や報いは広く大きなもので、決して漏らすことがなく、後になればなるほどますます重くなるということを知らないのである。

思うに、我々が最高に尊い方を敬い従うためには、香を焚いて祭祀をするだけでなく、常に万物の根源なる父〔である天主〕の大きいなる造化の働きに思いを致し、「天主が」必ず最高の知恵でこれを営み、最高の能力でこれを成し遂げ、最高の善を備えることによって、万物それぞれが必要とするものを欠けることなく満たす、ということを知ること〔が必要〕であって、そうしてこそ大いなる道を知るものと言るのである。ただ、その道理は隠れていて明らかにすることは難しく、広範なものであってすべてを知り尽くすことは難しく、知ってもこれを言い表すことは難しい。そうではあっても、学ばないわけにはいかない。「我々は」天主について少ししか知らないのであるが、その少しのことの有益さは、他のことをたくさん知っているよりもはるかに勝っている。

願わくは、この『天主実義』を読む者が、その文章がささやかであるために、天主の教えもささやかなものだと思なすことがないように。天主〔のことがらについて著すならば、その量〕は天地も載せることができなほほどであり、「まして」この小さな書物などにどうして載せられようか。

時に万曆三十一年^⑩、癸卯の年、七月十六日 利瑪竇が書す。

【注釈】

- (1) 五つの人間関係におけるべきあり方を示すもので、儒教倫理の中心をなす。まとまった形では『孟子』滕文公篇上に、「父子に親有り、君臣に義有り、夫婦に別有り、長幼に叙有り、朋友に信有あり」とあるに基づく。
- (2) 三つの重要な人間関係を表すもので、君臣・父子・夫婦の道を指す。
- (3) 中国古代の聖天子である堯帝と舜帝。
- (4) 周公は、名は旦。周王朝を建てた武王の弟で、魯の国に封じられる。周の制度や文化を定めた。孔子(前五五―前四七九)は、名は丘、字は仲尼。春秋時代の魯の国の思想家で、儒学・儒教の創始者である。
- (5) 原文には「天理天学」とある。
- (6) マテオ・リッチ(利瑪竇)が中国本土に入ったのは、一五八二年(万曆十)のことである。
- (7) 『新約聖書』の「ルカによる福音書」第17章21節に、「実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ」とある。
- (8) 原文には「上尊者」とある。
- (9) 『天主実義』首篇の16に引くアウグスティヌスの挿話を参照。また、『新約聖書』の「ヨハネによる福音書」第21章25節に、「イエスのなさったことは、このほかに、まだたくさんある。わたしは思う。その一つ一つを書くならば、世界もその書かれた書物を収めきれないであろう」とある。
- (10) 万曆三十一年は一六〇三年に当たる。

〔附記〕 本稿は、平成十五年度科学研究費補助金による基盤研究(C)「『天主実義』とその思想的影響に関する研究」で得られた研究成果の一部である。